

# 特別講演

講師

福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役会長

王 貞治

司会

FBS福岡放送アナウンサー

山田 真由美

## 特別講演「野球が教えてくれたもの」

福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役会長 王 貞 治  
(司会) F B S福岡放送アナウンサー 山田 真由美

王会長：皆さま、ご苦労さまでございます。今日から 2 日間の大会ということで伺っております。

『教育』というと、国にとっても、個人にとっても本当に大切なことだと思っています。その割には、もうちょっと教育に対して国の力が入ってもいいかなと思わないでもありませんが、あまりあれこれ言うと後でお叱りを受けますからこの程度にしておきます。

先生たちがあってからこそ日本の将来があると思っています。ですから、自分の仕事に誇りを持っていただいて、大いに頑張ってください。

私は野球しかわかりませんが、やはり、一つのことを通して学んだことというのは、どの世界でも通用するであろうと、私は確信しております。ですから、先生方たいへんご苦労なことが多いと思いますけれど、これからどうぞ頑張ってください。宜しくお願いいたします。

山田ア：ありがとうございます。近々の話題としましては、先月、文化功労者として選ばれ、

また、顕彰式は今月行われたばかりだそうですね。賞の受賞に関してはいかがお感じになりましたか？

王会長：たいへん名誉な話ではあるのですが、我々の世界というのは、ご存知のように団体競技の世界です。確かに私が顕彰をいただきましたが、決してこれは一人でできることではありませんので、プロ野球界がそういう形で世の中から評価されたと受けとめて、私は代表で受け取りに行ったと考えております。

ただ、そういう形で評価がされたということは、それだけまた責任も新たなものができたと思っていますので、野球界全体で気持ちをもう一度引き締め直して取り組んでいきたいと考えております。

山田ア：およそ 50 年にわたって、半世紀にわたって、野球というものに携っていらっしゃる様々な観点から、今日はじっくりとお話を伺わせてください。

まずは、競技者としての王貞治氏、野球を始めたのは子どもの頃ということでしたが、その頃の環境ですとか、どのような学校時代を過ごして来られたのでしょうか？

王会長：私は昭和 22 年小学校入学です。東京の下町でした。空襲がありまして、ほとんどの建物が焼け出されたりしていました。私たちがかくれんぼ等で使っていた消防署も焼けて、その外側だけが残っていたことをよく覚えています。それから、学校も 4 階建てくらいでしたが、2 階までが学校で使ってしまっていて、3 階 4



階は、焼け出された人とか引き上げてこられた方が住んでいるというたいへんな状況で、いわゆる現在の学校とはだいぶ違っていました。

**山田ヲ:** そのような中でも、ボールとバットに出会ったのですよね。

**王会長:** それしかなかったです。まあ、多分私と同じ年代の方も今日ここに来られていると思いますが、今のようにサッカーとかゴルフとか、プロスポーツになってテレビで放送されたりしているスポーツのほとんどがまだ無かったと思いますね。プロ野球は昭和21年に復活しました。戦争に負けて生活も苦しくて食べるものもないような時代に、いち早くプロ野球が復活したということは、当時のプロ野球関係者の英断だったと思いますね。やはり、本当に夢といいますか希望というものが少なかった時代にプロ野球が復活して、大人の方たち、子どもたちが少し明るい気持ちになるのに随分役立つのではないかと思いますね。ですから、私たちも小さいながらも、テレビなんでももちろんありませんから、新聞の欄にちょっと出たりとか、ラジオの放送なんかで聴いたりして、胸を躍らせていました。私たちが小さい時は川上さんとか、千葉さんとか、大下さんとか、そういう人たちがヒーローでしたね。

**山田ヲ:** うなずいている方もいらっしゃると思いますが、会場の中で、野球に携っていらっしゃる方、どのくらいいらっしゃいますか？…けっこう手が挙がりましたね。

野球のみならず、実は陸上部だとか、他の部活動にも借り出されていたというようなエピソードも伺いましたが、根っからのスポーツ少年だったのでしょうか？

**王会長:** 私、墨田区の小学校だったのですが、運動場が狭くて、野球ができませんでした。中

学校もやはり同じような学校だったので、実は野球部がなかったのです。それで、何かやりましょうということで、陸上部に入ったり、卓球部に入ったりして、かなり専門的にやりました。大会なんかに出ますと、それなりに勝ち抜いて、決勝までは行けませんでした。3位とかなるくらい専門的にやりましたね。

**山田ヲ:** そういった少年時代を支えられてきた王家のご家族の皆さんというのは、どういった雰囲気…環境だったのでしょうか？

**王会長:** 周りの人は、皆さん、生きるのに精一杯でしたから、子どもにかまっていられないわけですね。というのも、私の家が中華そば屋だったものですから、両親はずっと朝から晩まで働いていました。ですから私は、学校終わって帰ったら鞆を放り投げて公園に遊びに行って、皆それぞれの家庭の子どもたちが集まって、そこでやっていました。人数が少なければ車の数も少ないので、いわゆる公道ですよね、普通の道で、車が来たらタイムという形で、自分たちでルールを決めて、5人しか集まらない時は5人なりに、8人集まればとか、10人集まればというような形でやっていました。

**山田ヲ:** ご実家が中華そば屋さんというお話が出ましたが、今のヤフードームのところに、ベースボールミュージアムができておりまして、その中でも、実は中華そばを味わうことができますよね。

**王会長:** まあ、当時の方が全然美味しいと思いますが、やはり、子ども心に、その当時のことというのは、すごく大きく思いますね。「あの頃は美味しかったなあ」とかですね。店に働いている人がいまして、私が頼むと作ってくれたのですが、ある年齢になりましたら父親が「この人たちは、お客さんのために働いている

人たちが、もう大きくなったのだから、自分で食べるものは自分で作りなさい」と言われまして、見様見真似で教えてもらって作るようになりました。ですから今でも、麺類に関しては自分で作って食べますし、自分自身その方での自信はあります。

**山田**：では、実際台所に立たれて、お料理もすることも？

**王会長**：そうですね、スパゲティにしても日本そばにしても、中華ラーメンとかも、そういうのも作ります。ただ、男の料理というものは何でも高くつくんですね。どうせ買うならいいものを買おうと。日本そばを作るとなると、氷も買ってくるし、わさびもちょっとあればいいのに、わざわざ一本買ってきてすったりして。まあ、4分の1か5分の1使っただけで、次に使おうと思って水に浸けとけばもつなんていって、結局駄目にしてしまったりね。でも、やっぱり、それくらい何かやるんだったら徹底してやりたいという思いは、食べるものだけじゃなくて、全てのことに、私は持っているようですね。

**山田**：野球に関しても、それはもちろんだと思のですが、王監督にとっての指導者…劇的な指導者との出会いとなると、中学時代、例えば、荒川さんとの出会いだったりするのでしょうか？

**王会長**：そうですね。荒川さんというのは、その当時プロ野球選手でした。で、荒川さんは犬を飼っていて、ちょうどシーズンオフの11月に、犬の散歩がてら、我々が野球やっているところに來られたことがあります。その時、私は左投げのピッチャーでしたが、打つのは右で打っていました。で、私を見て、「何故君は右で打ってるの？左で打ちなさい」と言われて、左



で打ったら、たまたま二塁打が出たんですね。だいたい私、振り返りましても運がいい男だと思っております。何かの区切りの時に必ずいい結果がうまく出るようになっていて、もともと運がついていると思いますが、いちばん最初はそれでしたね。「これからずっと左で打ちなさい」ということで、それから、その後の野球人生がスタートしました。

**山田**：早稲田実業に進学されたのも荒川さんからの勧めがあったから、とも伺ったのですが。

**王会長**：はい。荒川さんから、是非、早稲田実業に入れと言われました。ただ、私は父親が中国の山の中から出稼ぎに來ておりましたから、将来的には中国へ帰ると、中国は貧しい国だから、やはり国の為頑張るということで、私の10歳上の兄は医者になりましたが、私は電気とか機械とか、とにかくそういう技術を身につけなさいと父親に言われて、子ども心にそうするものだと思っていました。残念ながら高校入試に失敗しまして、それだったら、もう荒川さんに勧められましたように野球の道に行くしかないということで早稲田実業に入ったので、結果的には、その時受かんなくてよかったということですが。一方、やっぱり、父親の言うように、そういう技術を身につけられたらよかったな、という思いは今でもありますね。

山田ヲ：そうですか。やっぱり、受験に失敗してしまった時というのは、記憶に深く残っているものですか。

王会長：そうですね。いいことと悪いことというのは、いいことはだいたいみんな憶えていないですよ。悪いこと、悔しい思いをしたとか、そういうことは本当に強烈に憶えていますね。私はちょうど受験に失敗しましたが、もう一つは、甲子園に私は4回出場させてもらいましたが、3年の最後の夏の大会の決勝戦で延長11回までやって負けました。4回続けて出ていましたし、決勝なおかつ延長11回で負けたというのは本当に強烈な印象でして、その後のプロ野球でもいろいろ憶えていることも多いですけど、鮮烈さといいますかね、そういう意味では、高校3年の夏に負けた時は一番強い印象として残っていますね。

山田ヲ：今でも夢に出てきたり、時折思い出したり？

王会長：そうですね、もう50年以上前の話なので、だいぶ定かではなくなりましたが。今でも、高校時代の野球部の仲間と会いますが、勝った時の話よりも、その負けた時の話に毎年なりますね。

山田ヲ：そういうことを話すことによって、きっと記憶に残り、次の奮起へとつながるのですね。

王会長：やっぱり悪いことがないとね、上へあがりませんよね。やっぱりもう、痛い目に遭う、それが、また次のステップへ向かっての原動力になりますのでね。ですから、私はプロ野球の選手たちが入ってきて、「とにかくどんどんやってみろ」と、「上手くいかないのは当たり前だからやってみろ」といいます。上手くいか

なかったら、じゃあ今度はどうしてみようかと方法を考えますよね。工夫もしますよね。

そういうふうに行っているうちに上手くなるっていうのは、段があつてなるわけではありません。いつの間にか、例えば入ってきた時にカーブなんか打てなかった人が、ちゃんと打てるようになるのですね。ところが、「こうこう、こうこう、こうやったから、いつ何日かで打てるようになった」ということではないですよ。何となく、身体で毎日毎日繰り返しやっているうちに、できなかったことができるようになる、見えなかったものが見えるようになる訳ですね。区切りは付かないですね。とにかく、いつの間にかできるようになるんですね。ですから、もうとにかくやるしかない、そういうことで、若い選手たちには、「常に繰り返しやるのが一番大切なんだ」と指導しています。

山田ヲ：繰り返しやって、身体で憶えていく。それを体現、実現させていくのですね。

王会長：我々は身体で表現する世界ですから。頭でわかっていたって何にもならないわけですね。選手というのは、最初入ってきた時何もわからないですよ。理論的に「自分のバッティングはこうこうこうで」という説明もできないのです。ピッチャーもそうです。何故自分がこんな速い球を投げられるのだろうかというのにはわからないと思います。ところが、やっているうちに、「ああ、こうこうこうだから、速い球が投げられるんだな」とか、「こうこうこうだから、自分はボールが飛ぶんだな」というのが、だんだんわかってきます。やっぱり周りの人たちを見て、「ああ、あの人はああいう点がいいんだな」とか、「ヘッドアップしているな」とか、「バットの先が下がっている」とか、人を見ながらだんだん憶えていって、理屈がわかってできるようになりますよね。それが今度は、理屈はわかるけどできなくなってきた

す。理屈がわかっていてもできなくなって、それを超えてしまうと、後はもう辞めるしかない。

コーチや監督になると、本当に口が達者になります。ただやっぱり、教える人というのは、絶対話術が上手くないと駄目ですね。人間というのはやっぱり言葉で色々会話するわけですから、説得力があるかどうかというのものはすごく大事なことです。コーチにもいます。ものすごく技術的には優秀ですけれど、それを伝えて相手に理解させる方法が下手な人と、ものすごくわかりやすく、若い人たちの耳に、右から左へ抜けないで、そこでちゃんと止まるという教え方ができる人ですね。ですから、私はコーチにいつも「話術というのは、教える側になったら勉強しなきゃいけない」と言っています。

**山田**：王会長ご自身、話すことというのは、小さい頃からわりとお好きだったのですか？

**王会長**：いやもう、人前で話すなんてドキドキしちゃってね。何を話していいかわかんないしね。それから、だんだん大きくなってきたら、例えば今日ここで話をしなきゃいけないってなったら、最初はこういうので入って一番、二番って書いてポケットに入れといて、いざ行ったら全然違う話をするとかですね、まあ、書いた通りには全然ならないと思います。ところがですね、もう今や70にもなりますと、今日はもうこうやって山田さんが質問していただいて、前もって打ち合わせをしていますからいいのですが、どこかの会に行くと挨拶をしろと言われても、何にも考えないですよ。でもちゃんとそこで出るようになっちゃいますね。まあ、これがいいのかわかりませんが、やはり、自然に自分の頭の中で、積み重なったものの中で、今日のこの場でどうい話をすべきか経験を積むと自然に出てくるようになる。ですから、こんなこと言うと怒られますが、今、ホークス

の秋山監督、二年監督をやりました。今年はリーグでたいへんいい成績でした。山田さんなんかは一番よくわかっていると思いますが、なりたての秋山監督と今の監督では、全然話し方がね、上手になった、違ったと思います。

**山田**：はい。違ったかと。

**王会長**：これはもう経験ですね。話をすれば「今日はちょっと何かが足りなかったな」とかそういうのが出てきますね。でもやっぱり話術というのは絶対大事だと思います。先生方は頭がいいわけですし、ものもいっぱい知っているんですから、あとは話術をいろいろ勉強して、その年代の子どもたちなりに理解をさせる。こっちがわかったというのでは何にもならないのですから、相手がわからないといけない訳ですから、是非話術を自分なりに勉強するということだけは、ちょっとして頂いたらいいかなと思います。

**山田**：今日は、幼稚園から高校までの先生がいらっしゃるということで、園児・児童・生徒さんに授業をされていることと思いますが、実は、話すのがあまり得意ではないとか、伝え方がほかにあるのではないかとと思われる方もいらっしゃいますか。今ベストな状態で生徒と向き合えていると思われる先生、いかがですか。いらっしゃいますか？あぁ、全然手が挙がらないですけど。

**王会長**：そう求められたら、なかなか手が挙げられるものじゃないですね。でもね、やっぱり自信を持っていいですよ。現在の自分に絶対自信がなきゃだめですね。ただ、プラス何を足していくかですから。現在の自分に自信がないなんていったら、じゃ何故先生やっているんだって責められちゃいますからね。我々もそうです。「コーチとして君はそれぞれの担当の部分で

自信を持ってやっているか？」と聞いて「ありません」なんて言ったら、「じゃあ辞めろ」ってなっちゃったりしますから。だから自信は大いに持って、それに何をプラスしていくかというだけの話だと思います。日頃の先生方のご苦労について世間的な評価は、新聞等やテレビなんかでいちいち言われませんが、それはもう、先生方に子どもさんを預けている方、教育関係者の皆さん、文部科学省とかすべての皆さんは、いちいち感謝はしませんけれど、「どうもありがとうございます」と常に思っていますから、そういう思いだけはね、口で言われなからそう思っていないというのではなくて、やっぱりそのような感謝の気持ちを皆さんが持っているということだけは、わかっておいて欲しいと思いますね。

**山田**：はい、王会長は22年間にわたる現役生活を終えられた後、すぐに巨人軍に指導者としてかかわることになった訳ですが、同じ野球というものに携る、同じユニホームを着ていても、競技者として、そして指導者として、という立場では、やはり全く異なってくるんでしょうか？

**王会長**：これはもう先ほども言いましたが、選手の時、もう自分の目の前のこんな幅のことしか考えてないです。自分のことで精一杯ですから、人のことなんて考えている暇はありません。ところが指導する側になったら違います。例えば、フリーバッティングをやっていますね。その時にカーンとすごくいい当たりをして、例えばスタンドに入らなくても、ものすごくいい当たりした時、選手はフッと監督の顔を見るんですよ。今の見ていてくれたかなあと。その時に、私がたまたま誰かと話をしたりしていると、選手はがっかりなんですよ。だからもう、とにかくできるだけ視界を広げて見るようにします。ブルペンでも、ピッチャーが5人6人

投げますから、その時も、キャッチャーが構えたところにバシッと投げた時に、やはりピッチャーはパッと見ますよ。その時に、ひとつうなずいてやれば選手もまた次もいい球放ってきます。これはやっぱり人の扱い方といいますかね、それは先生方もよくご存じとは思いますが、若い人を育てるといのは、「今の見ていたぞ、よかったな」と言葉に出して言うことも大事ですけど、態度としても表現できるわけですよ。若い人っていうのは不安だらけです。先のごことはわからないのですから。だからやっぱり不安なものをなるべく取り除いてあげるのが、言葉であり、態度です。視線を感じるというのはものすごく大事なことだと思います。先生方はたくさんの人を預かっていますから、全員の視線を感じながら全員に同じようにという訳にはいかないでしょうけれど、やはり、そういうものは大切だというのだけはおわかりだと思います。やはり、若い人というのは、伸びる時はグッと伸びます。きっかけなんですよ。だからなかなか伸びないような人、皆よりペースが遅れているような人でも、何かのきっかけでグッと伸びるんですよ。若い人の可能性といったものは本当にびっくりするくらいです。

ちょっと話がとびますが、WBCということで先ほどちょっとご紹介いただきましたが、アメリカでやりました時に、日本の代表の選手たちを率いてきました。その時の選手たちですが、日ごろはプロ野球選手で、ましてや日本代表に選ばれるような人が、本当に我がまま勝手なんですよ。

**山田**：我がまま勝手？

**王会長**：お金も僕らよりも持っていますしね。で、そういう人がいざ日の丸を付けてやった時というのは、本当に純真と言いますかね、チームの勝利の為にということで、もちろん野球を進めるためには犠牲的なものを求めることも

ありますけど、普段はチームを代表する人ばかりですから送りバントなんかしたことない選手ですよ。そういうような選手にも、「この場面、大事な場面だから送りバント頼むよ」って言ったら「ハイ」って、素直にきちっとやります。普段やったことないようなことも、きちっとやってきます。ですから、やっぱりこちらの目的が何かははっきりしていることと、自分が今チームのために何をやるべきかということとをわからせてあげたら、今の若い人は本当に素晴らしいものがあつたような気がします。この頃の若い人はどうのこうのと云いますけど、それは我々の時代の時も「この頃の若いモンは」と言われたと思います。だから、そんなことは未来永劫、これからもそういうふうなことがあると思いますけど、今の若いひとたちは本当に素直できちっとやる。ごく一部はいろいろあると思います。でも、どの時代も、100年後だってごく一部はいますよね。だけど、全体的に考えたら本当に優秀で真面目な青年たちにWBCで会えたというのが、ものすごく私のいい財産になっていますね。WBCが終わってチームに帰った時、何か若い選手たちに対する見方というのが変わったような気がしますね。すみません、ちょっと話がそれましたけど。

**山田**：そういった時、ホークスの監督として、そして日本代表チームの監督として、指導者のスイッチというのは切り替わるのですか？

**王会長**：そうですね、とにかく日本の代表の選手ですからね、今も言いましたようにバントとかなんか求められたことのない選手たちですから、技術的に指導するとかは一切必要ないです。その人に「よし！」ってダッグアウトから元気よく出ていくようにしてやりさえすればいいんです。動機付けですよ。皆で「よし、やろうぜ」、「今日勝とう」、そういうふうにしてグラウンドでバツと彼らが元気よく出

ていけるようにしてあげたらいいのです。日本の代表のようなチームの監督っていうのは、別に指導というのは一切なくてムードをいかに作っていくかということだけ考えました。

**山田**：その一方で、例えばここ福岡にいらっしやつた当時というのは、ホークスはずっと長い間 B クラスを歩んできたチームでしたが、巨人軍というところに長年いた立場からすると雰囲気というのはどうだったのでしょうか？

**王会長**：私が来た時、17年連続 B クラスでした。B クラスっていうことは優勝に縁がありません。そしてシーズンが終わればもう何にもありません。日本シリーズに出るわけでもありませんしね。ですから、多分 17 年のうちの 10 年くらいは、「ああ、あと何試合やったら終わる、自由になれる」くらいの思いで、最後の方の試合をやっていたと思います。でもこれはやむを得ないんですね。そういう環境に置かれちゃったら、そこで優勝を争っているチームの選手と同じような思いでやれというのは、やっぱりこれは無理な注文だと思います。まあ、ただ一つ例外はイチローがいますね。今年もチームは最下位だったと思いますけど、やっぱり 10 年連続 200 本安打という、100 年以上の歴史の中での新記録でした。そして、来年また 200 本打てば 11 回目の 200 本以上安打ということで、これもまた記録ですよ。ですから、イチローのモチベーションとしては、そういう個人的な記録がありますから、彼は来年ももちろん元気よくやってくれると思います。普通の人がある個人的な目標はない、チームが勝ったって負けたってそれほど嬉しくもないし悔しくもない、そういう状況に置かれたら、やる気は起きません。「打球が飛んできました」、「捕りにいきました」、「ああ捕れませんでした」で終わっちゃうんですね。ところが、優勝を争ってい

るような人は、何とかしようという思いがあるから、ほんのちょっとですけどグローブにかするんですよ、その思いだけで。そこでグローブにちょっと当たっただけで球の勢いが止まります。そうすれば、その野手をカバーした人が捕る。一塁はセーフになるかもしれません。でも、塁にいたランナーが一つしか進塁できないわけですよ。でも、それが、触らなければ二つの塁の進塁になっちゃうわけですね。そういう小さなことの積み重ねが、結果的に勝者か敗者か、その差になるわけですよ。それが、優勝争いをしているチームとそうでないチームの差なのです。今年のロッテ、日本シリーズありましたよね。あの時のロッテの選手の気持ちというのは、まさにそういうものが、チーム全体にみなぎっていたんじゃないかと思いますね。

**山田**：ロッテの今年のチームを見て、例えば、西村監督という指導者は、王会長から、どのように映りましたか？

**王会長**：そうですね、我慢強い。いつもニコニコしていて、私にはできませんが、本当によくぞ、あのチームをね。前任者がバレンタインというたいへん人気のある監督で、本当にグラウンドに出たらいつもサインをしているんですね。絶大なる人気のある人でした。ところがその監督と新たな契約をしないで、西村監督という二軍監督をやっていた人を監督にしたんですね。やはり球団としては人気とか、観客動員数とか、そういう面からするとマイナスがわかった上で、敢えてそういう人事をしたんですね。まあ、西村監督は二軍の経験もありますから、今年の本塁打で活躍した若い人たちを二軍で十分彼らの練習ぶりから何からみて、能力もよく把握していたわけですね。ですからああいう形での思い切った起用法になったと思います。日本ではだいたい、まあ私もその一人

ですが、選手時代頑張った選手とかね、名前がある選手が監督をするっていうのが多いんですよ。でも、アメリカでは全然別で、どんなに優秀な選手だった人でも、一番下のクラスから経験を積みませ勉強させるんですね。一番下だったら失敗もできるわけですよ。そしてある程度実績を積んで、野球というものの監督を務められるなという判断をしたら、3Aの監督とか一軍の監督にするんですね。まあ、今の学校の先生方の仕組みは知りませんが、多分、大学の教員の資格を取る試験を受けたからってすぐ大学の先生にはなれませんよね。

**山田**：なかなかその後の採用試験がたいへんですよね。

**王会長**：野球界ではそういうふうな形をやるということです。で、選手の成長過程も見ていますし、いろいろな場面、例えばお客さんがほとんどいないところでの経験なども積んで、選手たちから信頼される監督にならないと駄目なのです。「この監督に任せておけば大丈夫だ」、「この監督の言うとおりにやっていたら勝つ確率が一番高い野球をやるんだ」という信頼感を選手が持てなかったら、チーム本来の力というのは機能しないと思いますね。そういった意味では、今年の本塁打が西村監督を起用して日本一になったというのは、今後の日本の野球界の監督人事やコーチ人事というのにすごくいい影響といたしますかね、違った面が出てくるのではないかと思います。

**山田**：現在、王会長は、球団の会長として、例えば監督ですとかコーチですとか、球団全体を統括するお立場でいらっしゃると思いますが、その役目になって、また変わって見えてきたものというのはありますか？

**王会長**：今度は、ユニホームを着ていない人の

部分も見なければいけません。

山田ア：もっと広く、後ろまで、ですね。

王会長：やはり、チームが強くなるためにはこうなのだというのは、それぞれの立場によって視点というのは変わってきます。そういった意味では、私もいい勉強をさせていただいた。一年間やってきて、今年はいへん残念な思いをしました。ちょっと指がかかったのですが、残念ながら滑り落ちてしまいました。来年は、確実にそれをものにすべく、新聞等をいろいろ賑わしていますが、補強に関しても、育成に関しても、それから若手のレベルアップも含めて、まだまだ足りないの、これからそういうものを強化していきたいと考えています。

山田ア：ドラフトも行われまして、ホークスにも新戦力がまた新たに加わると思います。また、高校の後輩でもある斎藤祐樹投手なども、パリーグに加わって、来年も賑やかになりそうですね。

王会長：そうですね。斎藤祐樹はホークスに入団できなかったのは大変残念だったのですが。とにかく、我々の世界というのは、毎年 100 名くらいの新しい戦力が入ってきます。ということは、100 名入るといのは 100 名いなくなるということです。定員が決まっていますから。私たちは常にふるいに掛けられています。厄介なのは、年々ふるいの穴が大きくなるのです。ですから、自分自身を大きくしない限り落ちことされちゃうんですね。だから、野球選手として、それぞれのポジションがありますが、やはり自分の特技、走るのなら走ることにスペシャリスト、守備でボールを捕るということならボールを捕ることでのスペシャリストを目指さなきゃいけないんですね。ですから、全部が 80 点ですという人はあまり必要とされな

いんです。ある面が 95 点とか、他のところが 70 点でもいいんです。ある面が 95 点ならいいんですね。例えば今、楽天に山崎という選手がいます。もう 43 歳ですが、相変わらず大きいのを打っていますね。守備は守れません、足も遅いです。ファーストに出て、ホームに帰ってくるには多分ヒットが 3 本要るでしょう。そういう選手ですけど、チームにとっては必要な選手ですね。そういうようなスペシャリストが欲しいわけですね。

今年斎藤祐樹が入ったということで、まあ華やかです。もう新聞なんかにも大きな字で出ますけど、一方では、本当にまだまだやりたいのに辞めざるを得ないといって辞めていった人もいるのですが、それは残念ながらあまり新聞に出ないんですね。ですから、そういった意味では厳しい社会だなと、改めてこの 11 月くらいになると思うんです。ところがすぐ忘れちゃうんですね、また、新しい年になると華やかな話になってきますのでね。イチローはですね、4 時から 6 時までは、一年中自分のトレーニングの時間にすると決めているんですね。どんな約束があろうが、たとえば食事しようと誘っても「7 時からにしてください、私は 4 時から 6 時までは自分の時間、トレーニングをする時間にしています」と答えます。とにかく 4 時から 6 時までは、絶対に自分のトレーニングといえますかね、野球に当てはめる時間として、もう取ってあるんです。これはシーズン中、シーズンオフは関係ないんです。例えば今日もそうです。今イチローはどこにいるか知りません。日本にいるかアメリカにいるかわかりませんが、今 2 時ですね、あと 2 時間後からその後の 2 時間は、彼は自分の、人に絶対譲れない時間として野球人として必要なことをやる。今、試合はやってないんですよ。だけど彼曰く、「私は野球の選手です。一年間野球選手です。ですから試合はやりませんが自分を高める為に、常にこの 2 時間はやります」ということで

すね。ですから、来年一月などになると、新聞等でニュースになって皆さんご覧になると思います、映像でも出ると思いますが、室内の練習場で、野球をはじめ彼は初日から全力で投げられます。初日から全力でバットが振れます。皆びっくりします。でもそれはびっくりする人にとっては初日であって、イチローにとっては初日ではないんです。だから、いかにそうやって継続してやっていくというのが大事かということです。身体は正直ですから、急にやろうたってできない、やってないことはできないですから。私、勉強はあまりしたことありませんが、野球をやったことによって色々学んだことが、いつの間にか頭の中に入っていると思うので、やっぱり身体で憶えるということはものすごく大事なことだなと思います。

ここに、「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」という大会のテーマがありますが、大変素晴らしいなと思いました。先ほど、体育の時間って週に何回あるのか聞いたら3時間と伺いました。これからもっと増やしたいという話もありました。やっぱり人間の基本は、健康と体力ですよ。やはり、子どもってどんどん大きくなるわけですから、その過程で基本である体力をしっかり身につけさせる、体力の向上というのは、生きる基本だと思いますよね。テーマに書かれていることを見て、すごく心強く思いました。ですから、私は野球というか、いわゆる体育の関係だけで生きてきた人間ですけども、まあ、現在70歳になっても、こうやって元気でやっています。まあちょっと残念だが胃がないので、食べる楽しみがなくなっていました。でも、こうやって元気でやられているのは、若い時にこうやって体力を基礎的に鍛えたからだろうと思います。ですから、子どもさんたちも、もちろん、体育の得意な人も得意じゃない人もいるでしょうけど、得意じゃないからやらなくていいとかじゃないでしょうね。さっ

き言いましたよ。こうやってどんどん伸びる人もいるけど、時間かかる人もいる。きっかけで伸びる人もいるわけですし、早く伸びるか遅く伸びるかの違いですから、身体のことに関しては、できない人に関心をもってあげて、「できるようになるよ、今できないけど、いつかできるようになるよ」といった形で指導してほしいと思います。こういうことは、本当に先生方はご苦労だと思いますけど、やって欲しいと思います。

こういう歳になると、冠婚葬祭っていっても、葬祭が多くなるんですよ。また、あいつが死んだとか。葬式っていうのは突然きますからね。結婚式っていうのは前もって連絡来ますけど、葬式なんて本当に突然ですよ。そういうのを身近に感じるようになったなあと、本当にそのように思います。でも、そのもってというのはね、やはり、子どもの時からの、身体をどうやって鍛えているかということなのですね。ですから、まあちょっと余分なことですけど、100人もいれば1人や2人怪我する人がいるのは当たり前ですよ。それを怖がっちゃって、みんな怪我しないようにそこそこやっとうるじゃ、子どもの体力は向上しませんよね。だからやはり、怪我をしたらケアすればいいことで、やはり、日本の将来を担う子どもたちの体力を向上させる為に、皆さん頑張ってくださいと思います。

先ほど世界少年野球大会というお話がありました。世界の子どもたちを集めて野球教室をやるんですが、とにかく子どもってというのは言葉わかんなくても意思の疎通ができるんですよ。たとえば今日の10時ごろ会ったのに、今くらいまでの4時間くらい経っちゃうと、何の言葉で話しているのかわからないけれど、もう仲良くなっていろいろやったりしますよね。子どもの吸収力はすごく素晴らしいと思うし、失敗も恐れなくて、ちゃんとした英語を話さないといけないとかそんなこともないし、子ど

もは本当にすぐ仲良くなりますよね。

**山田ヲ**：野球を通じて、言葉を問わず、会話を  
するわけですね。

**王会長**：子どもってというのはこちらの仕向け方。  
子どもなんて真っ白い画用紙みたいなもので  
すから、大人は黒い墨で書いてやれば黒くなっ  
ちゃうし、赤い字で書けば赤くなるんだし、大  
人次第。大人次第といっても先生方ばかりじゃ  
ないですよ。親もそうですしね、世間もそうで  
すけど、やはりそれだけ子どもというのは、純  
真なものであって、こっちの問いかけ次第でい  
くらでもなると思います。

子どもの野球教室をやっている時、投げた時  
にね、最初は捕れないんですよ。悲しそうな顔  
をするんですよ。でも、何回かやっていって「こ  
んなの捕れるよ」と言って投げてやって、パッ  
と捕れた時の彼らの嬉しそうな表情。これを見  
るとね、「ああやっぱりこの運動をやって良か  
ったな」と思うんですよ。最初、バットに当た  
りませんよ。ところが、何回かやっているうち  
に当たるんですね。その時本当に、瞳を輝かせ  
て、嬉しそうな顔をします。最初はできないの  
が当たり前なのです。それができるようになっ  
た時に、彼らがどれだけ自信をつけるかですよ  
ね。そんなことをやっているうちに、私はもう  
これを 20 年やっています、その当時参加し  
た子どもたちが 30 になった今、子どもたちの  
世話を手伝ってくれています。本当に子どもた  
ちというのは、向けようによっては、どんど  
変わるということですよね。だから幸い野球を  
通して、こうやって幸せな人生を歩んで来られ  
ました。野球を通して、子どもたちに、少しで  
もいい思いをして欲しいなあと思います。よく  
子どもの野球大会なんかも行きますが、「甲子  
園いきたい人」って聞くと、皆、手を挙げます  
よ。自分のことわかっていないからね。中学生  
くらいになると、多少手の挙がり方が減ります

ね。じゃ、「プロ野球に入りたい人」って聞くと、まあ何人か手を挙げたりしますよね。そう  
言われて、「せっかくだからやってみようかな」  
というような人が一人でも二人でもいてくれ  
ればいいなと思います。プロ野球だってそうで  
すよね。私もプロ野球選手になれるとは思って  
いませんでしたが、いつの間にかそういう道が  
切り開かれてしまっ。ですから、やっぱり子  
どもたちはすごく可能性もあるし、こちらの持  
っていきようによっては、すごく高い目標に向  
かって頑張ってくれるようになるんですね。

私は今こうやってお話して、月に何回かし  
子どもたちに会えませんが、先生方は毎日会っ  
て、子どもたちと毎日勝負をしているわけ  
ですから大変だと思いますけど、でも、それが国の  
基本だということですね、これからも頑張ってい  
ってくれたらと思います。野球の話はしたって  
あれでしょうから、ちょっと織り交ぜて話をさ  
せていただきましたけど、どうぞ、自分たちの  
やっている仕事を、「すごく大事なことをやっ  
ているんだ」というプライドだけは自分でお持  
ちいただいて、これからも頑張ってもらいた  
いと思います。

何か、質問のコーナーがあるんでしょう。

**山田ヲ**：そうですね、会場の皆さまから、お時  
間が 5 分か 10 分ほどとなりましたが、直接王  
会長が応えてくださるとのことなので、ご質問  
のある方は挙手をお願いできますでしょうか、  
いかがでしょうか？

**王会長**：野球をね、先ほどお手を挙げられて。

**会場 A**：ご指名ありがとうございます。小学校  
の卒業アルバムにホームラン王になりたいと  
書いたものです。宜しくお願いします。あの、  
指導者として、一番ピンチだった時のことを振  
り返っていただいて、その乗り越え方といいま  
すか、その乗り越えた時の想いなどや、具体的

な方策などをもし教えて頂けると嬉しいと思います。

**王会長：**そうですね、まあ我々の世界というのは、要するに、先ほどちょっとドラフトの話をしましたけど、甲子園で活躍したとか、ある程度素質を持った人たちが入ってくるんですね。だから、全然この世界で、まるっきりこの世界で通用しそうでない人は来ないわけです。やはり、チームが勝っている時はいいんですけど、私も最下位を、選手として1回、監督として1回経験しましたが、そういう時に選手たちの気持ち離れていくのが一番悲しいというか辛い。やっぱり結果がいい時は自然と結ばれてくるんですけど、結果が悪くなると離れていきますし、責任転嫁といいますか、「あいつが打たれたから」だとか、「あいつがエラーしたから」だとか、「あいつが打てなかったから」だとかいうことがありました。そういう時に、「キャンプの前に皆で誓いあった目的をもう一回思い出してやっていこうじゃないか」というような話をしたことがあります。みんなの心が離れるような感じがしたことが一番辛かったですね。その時に、いかにしてそれを一つに、少しずつですけれど寄せていくために、選手に問いかけをしていくんですね。「打った時、気持ち良かっただろう、あれを一回でも二回でも少しでも多く味わおうじゃないか」、「チームの勝利に自分が役立った時、嬉しかったじゃないか」というような問いかけをもう一回してですね。「もう昨日までのことはしょうがないじゃないか」と、「これから取り返すチャンスは十分あるんだから」というふうなことで話しかけて、彼らに、その気になってもらうしかないんです。手は出せないんです。いわゆる、叩くとかそういう意味じゃなくて、過去の負けちゃったことに対してはしょうがないわけですからね。やはり、悪い時ほど、心に問いかけるというか、そういうことも大事なんじゃないかなと、

そういうふうに思いますね。

**山田ア：**では、もうひと方…王会長からご指名を、どなたか？

**王会長：**どうぞ、僕の方の時間はいくらでもありますから、皆さん時間あればどうぞ。

**会場 B：**鹿児島で教員をしているんですけど、出身は長崎出身で、中学校の時に城島選手と練習試合もしたことがあります。で、その城島選手が今や、日本を代表する捕手になっているんですが、中学校の時とかは、やんちゃだったって聞いたのですけども、王監督と、どのようなかわりがあつて城島選手をああいうふうに、日本一のキャッチャーになるように育てていったのかなあと、そのかわり方というのを教えていただければと思います。

**山田ア：**もう、二時間くらい時間が必要な…。

**王会長：**あの、城島はですね、中学一年生の時ですか、長崎で野球教室がありまして、その時に彼は、私が教える班の一人としてバッティング練習をしたんですね。その時にやっぱりたいへん目立ちました。それで一巡して、ちょっと時間があつたので、「おい君、もう一回打ってごらん」と言って私は彼にもう一回打たせました。で、最後の講評で「こうこうこういうことで、バッティングはボールをしっかり見て打ちましょう」とか「後ろの足で回転をすることがパワーを生むんだ」という話をしたんですが、私は城島を二度指名したことを、全然憶えていないんですね。ところが彼は憶えていたんです。それで、私は大分の別府大付属ですかね、そこで彼の入団交渉に行った時に、一番初めに城島は、「こういうふうなことで二度指名されたことがものすごく自分の中で自信になりました」と言いました。別にわたしはそんな褒めた覚え

はないのですが、彼はやはり二度指名されたということは、自分のバッティングが僕の目に付いたんだろうということでしょうね。で、私は思いますが、野球はですね、野球、といってもほかのスポーツもそうだと思います。勉強は別ですが、素質 90%だと思います。90%は素質だと思う。あとの 10%は運と練習ですよ。僕はそう思います。ですから、城島は、元々いいものを持っていました。それから彼は貪欲です。向上心がものすごく強いですね。ですから、妥協しません。先輩だろうが後輩だろうが、チームの勝利の為にキャッチャーというのは守りの時の指揮官ですから、そういったことで、彼は本当に身体を張ってホークスのホームベースを守ってくれたんです。そして二回日本一になりましたけど。で、今、アメリカ行って今年から阪神帰ってきて、残念なことに半月板の手術をして来年はシーズン途中くらいからしか出られないと言っていました。やはり、キャッチャーとしてピッチャーの球を受ける、バッターとしてバットを振ってヒットを打つ、ホームランを打つ、だけの選手ではないと私は思っています。彼は、日本の野球の将来をいろんな形、監督としてとかコーチとしてとか、そういう形で大いに日本の野球界の発展の為に頑張ってくれる男だろうと思います。やはり、目立ちましたよね、そういう時から。やはり、プロに入って工藤とか武田とか先輩たちになんか厳しくされましたが、もう、負けん気で、それを撥ね退けて、キャッチャーでも、ただただ受け取るキャッチャーではなくて、ピッチャーの長所を引き出すね、そういうキャッチャーになりましたね。ですから、まあ、去年帰ってくる時に、私電話をもらいまして、「よしわかった」といって球団といろいろ交渉したんですが、残念ながら彼をホークスに呼び返すことはできませんでした。まあ、この一年を考えてみたら、彼を逃したことが一番悔しいというか、残念に思っています。

山田ア：では、もうひと方よろしいですか、はい。

会場 C：愛知県から来ました吉田といいます。今日はあの、王監督の、王会長の話が聞けるといことで、同じ学校の先生に代わって参加させていただきました、ありがとうございました。で、王監督という言葉をもう一度テレビで聴きたいなあ、ユニホームを見たいなあという思いがあります。今回楽天の方に星野監督がまた復帰されましたけど、是非そんな形で復帰していただければすごく嬉しいなと思います。その辺の考えを聞かせていただけたらと思います。

王会長：ありがとうございます。いやいや、これはですね、我々のような立場の者からしたら、こんな名誉な話はないんですね。こういう話を頂けるといのはね。でも残念ながら、先ほどもちらっと言いましたが、胃がないので、体力という点ですね。やはり、体力という点で。監督の仕事って本当に激務だと思います。私は、やっている時はそういうふうに思いませんでしたが。試合は三時間ですが、試合の前、前の晩の試合が終わった時から、反省から何からですね、次の日の、もう今や、次に相手のチームは誰が投げてくるとかわかっていますからね。それに対して、どういう打順を組もうとか、この選手の調子がちょっと下がっているから、打順を入れ替えようとか、この選手をひっこめてこの選手を使おうとかね、いろいろあるんですね。ですから、現在の私の体力では本当に今のお話はたいへんありがたかったんですが、私の体力でははっきり言いまして、チームにもファンの皆さんにも、ご迷惑を掛けると思います。ですから、今のお話はずっと頭に留めさせて頂きますが、その分、秋山監督が現場の選手たちを、私はフロントなどそういう方で私のやれることで、少しでもいただいた恩返しができればと思います。どうもありがとうございました。

**山田**：ありがとうございます。では、お時間を過ぎましても熱心にお答えくださいますありがとうございます。今一度、会場の皆さまにひとこと。

**王会長**：せっかく調子に乗ってきたところだったんですが。この今の話が本題ではなくて、これから皆さんいろいろ問題がおありだと思うんで、そういった意味ではちょっと気分転換をして頂けたんじゃないかと思います。本当に教育というものは、もっともっと高いレベルで扱われていいんじゃないかと思います。もちろん、経済的な問題とか国際的な問題とかいろいろあるかもしれませんが、僕はやっぱり教育という部分は、もっともっと高い次元で考えていただいて、もっともっと国として力を入れていっていいんじゃないかなと思います。これは、先生方が、今まで頑張られたことの成果だと思います。

ただ、評価がもっと高くなるようにするには、先生方がもっと実績を示して頂かないとこれは難しいだろうと思います。ですから、やはりそういった意味で、我々ももちろん、サイドから、何かありました時にはそういう形で、そういうふうな応援ができればと思っておりますが、先生方のご苦勞はよくわかっているつもりです。これからも、本当にたいへんだと思いますが、やはり、誇りをもってお仕事に取り組んで頂きたいと思います。先生方がいなかったら国は成り立たないのですから。子どもは国の宝と言いますし、その子どもが全ての面で豊かな心を持っていればもっともっといいわけですから、どうぞ皆さま方、ほんとうに大変なことだと思います、報われることはないと思います、給料は安いだろうと思います、でも、やっぱり仕事ってですね、自分の誇りを持って取り組むと自分の身体の中に力もみなぎりますしね、

「よし！」っていう気持ちが出てくるだろうと思います。仕事と考えるとできないと思いませんよ。

壇上から偉そうなことを言わせて頂きましたが、「自分たちがいなければ国は成り立たないんだ」という思いを持って、これからまた明日以降、頑張っていたきたいと思います。とりとめない話をさせていただきましたが、野球を通して、私なりにいい人生を歩んでこられたと思っています。また、今や、いろんな形で日本の将来を担う子どもたちに野球というものを通しながら、少しでもいい人生を味わえるような形で、サイドからサポートしていきたいと思っております。どうぞ、先生方も、健康に気を付けられて、頑張っていたきたいと思います。どうも、今日はありがとうございました。

**山田**：ありがとうございました。本日は、第49回全国学校体育研究大会福岡大会特別講演として、王貞治会長をお迎えしての「野球が教えてくれたもの」、以上をもちまして特別講演、お開きとさせていただきます。

会場の皆さんの目が、王会長からのメッセージを受けとられて、とてもキラキラと輝いて、これが児童さん生徒さんのいろんな方々へと広がっていくと嬉しいなと思っております。本日はどうもありがとうございました。

